

イベントレポート 『2010 GT耐久東海シリーズ 第4戦』 (4時間耐久)

開催日 2010年9月26日(日)

9:40 決勝スタート 13:25 チェッカー

天候 晴れ後曇り

最高気温 22.6 (14時)

場所 スパ西浦モーターパーク

エントリー台数 22台



2010年9月26日(日)愛知県蒲郡市のスパ西浦モーターパークにおいて、2010K耐久/GT耐久東海シリーズの第4戦が行われた。

記録的な猛暑となった今夏。9月に入っても各地で35を超える猛暑日となっていたが、数日前より初秋を思わせる陽気となりこの日も涼しい朝を迎えた。

朝には雲ひとつ無い絶好のレース日和となったが、天気予報では午後からは雨。各チームともレース終盤での天候の行方を気にしながらのレースとなった。

また、GT耐久は普段は決勝時間が3時間だが、今回の第4戦のみ決勝が4時間となる。この長丁場がどう影響してくるのか。

「1+2」クラス(1500cc以下のNA車と、1200cc以下のターボ車)

前回第3戦はヘビーウェットの難しい路面に足をすくわれた車両が多かったが、今回は完全ドライ路面の中でのレース。前回とは違ったオーダー順になるのであろうか。また、ポイントリーダーであるNo.3「メタルクラフトRT」が欠場のため、他のチームはポイントを伸ばすチャンスでもある。

予選

予選1位となったのは、No.110「アライメント浜松シティー」でタイムは1'01.595をマーク。このタイムは総合でも1位となるもので、ポールポジションを確保する。

2位に入ったのはNo.16「プロジェクトTスターレット」で、タイムは1'03.443。前回欠場のため今回はポイントを伸ばしたいところで、絶好のポジションに付ける。

3位にはNo.84「浜松日産withメビウスマーチ」が入り、タイムは1'04.817を記録。

4位には昨年シリーズ2位ながら今年初出場となるNo.13「ケンMMS藤井 岸本RSカルタス」が1'05.681で続く。

以下5位にNo.56「COCPIT高橋N+ EP91」、6位にNo.86「マーチ&スィフト屋のマーチ」と続いた。



序盤

決勝開始から75分が経過した時点では、60Lapを周回したNo.16「プロジェクトTスターレット」がトップに立つ。

これを追う2位にはNo.110「アライメント浜松シティー」が58Lapで付ける。

続く3位は57LapでNo.13「ケンMMS藤井 岸本RSカルタス」、4位は56LapでNo.84「浜松日産withメビウスマーチ」、5位は55LapでNo.56「COCPIT高橋N+ EP91」、6位はNo.86「マーチ&スィフト屋のマーチ」と、きれいに1周ずつの差で順位する形に。



中盤

今回の決勝は4時間の長丁場。2時間を経過したところでも半分は消化したに過ぎない。

2時間を経過したところでは、105周で2台のマシンが僅差の争いを繰り広げる。1位はNo.110「アライメント浜松シティー」で、これを16秒差でNo.16「プロジェクトTスターレット」が追いかける。

3位争いも100周のNo.84「浜松日産withメビウスマーチ」と99周のNo.56「COCPIT高橋N+ EP91」の2台がしのぎを削る。

また5、6位は、No.13「ケンMMS藤井 岸本RSカルタス」とNo.86「マーチ&スィフト屋のマーチ」が97Lapの同一周回で争いを繰り広げる。



終盤

スタートから約2時間半の時点でNo.84「浜松日産withメビウスマーチ」がコース上でストップ。マシントラブルによりこのままだとタイヤとなってしまう。

3時間を経過した時点ではNo.16「プロジェクトTスターレット」がトップに立つ。しかし同一ラップのわずか6秒遅れで、No.110「アライメント浜松シティー」が追いかける。

3位のNo.13「ケンMMS藤井 岸本RSカルタス」は122Lapを周回するが、1周遅れでNo.86「マーチ&スィフト屋のマーチ」がピタリとマークする。

5位のNo.56「COCPIT高橋N+ EP91」は118周で、ぎりぎり表彰台を狙える範囲に付ける。



最終結果

最終的にトップでチェッカーを受けたのは、ポールポジションからスタートしたNo.110「アライメント浜松シティー」であった。153周を走り切り、総合順位でも1位という堂々の成績を収めた。

続く2位には終始トップ争いを繰り広げたNo.16「プロジェクトTスターレット」が151周で入った。

3位には、終盤に一気に追い上げたNo.13「ケンMMS藤井 岸本RSカルタス」が148Lapで久々の参加を表彰台で飾った。

以下4位にはNo.86「マーチ&スィフト屋のマーチ」が144Lapで、5位にはNo.56「COCPIT高橋N+ EP91」が143Lapで続いた。

また途中リタイヤとなったNo.84「浜松日産withメビウスマーチ」は、規定周回数をクリアしていたため、6位のポイントを獲得した。



シリーズ展望

今回の優勝でNo.110「アライメント浜松シティー」が65ポイントとなり、頭一つリードする形となった。

2位には47ポイントのNo.56「COCPIT高橋N+ EP91」が、不参加だったNo.3「メタルクラフトRTスターレット」をかわして上がってきた。

シリーズ4位には今回の準優勝で一気にランクアップしてきたNo.16「プロジェクトTスターレット」が、5位には「1クラス」のマシンながら着実にポイントを積み重ねて来たNo.86「マーチ&スィフト屋のマーチ」と続き、このあたりまでがシリーズ表彰の対象範囲内となる。

シリーズ優勝の可能性が残っているのは上位2チームであるが、No.110 圧倒的優位な状況での最終戦となる。





3Cクラス(1501~2000ccのNA車と、1201cc~1800ccのターボ車の、改造範囲の狭いクラス)今回は10台のエントリーがあったが、イベント当日に1台が30クラスにチェンジしたために9台での争いとなった。前回はヘビーウェット路面に苦しんだマシンが多かったが、今回はドライ路面での戦い。前回とは違ったチームが速さを見せるのか。

予選

予選1番手のタイムを出したのは No.106「D & Mプジョー106」で1'03.131をマーク。前回雨の中の予選で見せた速さをドライでも発揮し、全てのコンディションで速いという印象をライバルに植え付ける。2位には No.75「DXLシーワンNチームEP82」が入り、タイムは1'03.705を記録。第2戦で優勝を飾るも前回は表彰台を逃しており、今回はリベンジに燃える。3位には No.28「アクセントBスターレット」が1'04.829で続く。このチームは第2戦で2位を獲得していることから上位に食い込む力を持っていることが伺える。4位の No.830「CNLシビック」は、3位と0.04秒の超僅差で、上位を狙うための好位置に付ける。以下5位に No.80「ハガクリニック シンワ サクソ」、6位に No.41「シーワンNチーム3号車トレノ」と続く。



序盤

スタートから45分が経過したところでのトップは予選5位から大きくジャンプアップの No.80「ハガクリニック シンワ サクソ」で32Lapを周回する。これを追いかける2位から4位までの3台は同一の31Lapでの争い。2位に No.28「アクセントBスターレット」、3位に No.33「チーム海老天ミラーージュ國盛WP」、4位に No.106「D & Mプジョー106」と続く。



また 5 位の No.111「StecAE - 1ファジートレノ」と、6 位 No.41「シーワンNチーム 3 号車トレノ」は 30Lap の同一周回。共に同型式の AE111 である点も興味深い。

そんな中予選 2 位の好位置からスタートした No.75「DXLシーワンNチームEP82」は 20 分を経過した時点でマシントラブルにより早々にリタイヤとなってしまふ。

また 2 位に付けていた No.28「アクセントBスターレット」も、50 分の時点でやはりマシントラブルに見舞われてリタイヤとなる。

中盤

決勝の半分となる 2 時間を経過した時点でのトップは No.80「ハガクリニック シンワ サクソ」で 103 周をラップ。これを追う 2 位には No.106「D & Mプジョー106」が 100 周で付け、前戦さながらのオーダーになる。

3 位は 98 週の No.111「StecAE - 1ファジートレノ」が、じわりと順位を上げてくる。

以下 4 位の No.33「チーム海老天ミラージュ國盛WP」が 96Lap、5 位の No.41「シーワンNチーム 3 号車トレノ」が 95Lap、6 位の No.830「CNLシビック」が 94Lap と、非常に接近した順位となる。

また 7 位を走っていた No.17「ヒロエンタープライズEF9」は 2 時間を目前にリタイヤとなり、このクラスは残り 6 台での争いとなる。

終盤

3 時間を経過した時点でもトップ争いはなおも均衡。129 周をラップした 1 位の No.106「D & Mプジョー106」を 1 周差で No.80「ハガクリニック シンワ サクソ」が追いかける。

3 位には No.33「チーム海老天ミラージュ國盛WP」が 124 周で付け、4 位の No.111「StecAE - 1ファジートレノ」は 123 周、5 位の No.41「シーワンNチーム 3 号車トレノ」は 122 周で、表彰台を懸けて熱い戦いを繰り広げる。

6 位の No.830「CNLシビック」は 117 周と表彰台を狙うには厳しい状況に。

最終結果

このクラス、トップでチェッカーを受けたのは No.106「D & Mプジョー106」で 152 周を走りきった。前戦ではトップと僅差での 3 位に終わったが、今回はリベンジを果たした形となった。

2 位には 149Lap で No.80「ハガクリニック シンワ サクソ」が入り、同門チームで 1 - 2 フィニッシュとなった。

3 位には時間を追うごとにじわじわと順位を上げてきた No.111「StecAE - 1ファジートレノ」が入り、2 戦連続での表彰台を獲得した。

4 位の No.33「チーム海老天ミラージュ國盛WP」は 3 位とわずか 1 周差であったが、毎戦同様に安定したレース展開を見せてくれた。

5 位には No.41「シーワンNチーム 3 号車トレノ」が入り、開幕戦以来の入賞となった。

6 位には幾多のトラブルを乗り切った No.830「CNLシビック」が 128 周でチェッカーを受けた。



シリーズ展望

前戦までのポイントリーダーであった No.75「シーワンNチーム」が、今回はリタイヤのためにノーポイントで終わりポイントは 45 点のまま。これにより今回の優勝で 20 ポイントを獲得した No.106「D & Nレーシングチームひまわり」が、合計ポイントを 64 点と伸ばし、2 位以下を大きく引き離す形に。

優勝の可能性を残すのはこの 2 台となったが、No.106 がかなり優位であることは間違いない。

一方 3 位争いは No.111「チームAE - 1」が 38 点、No.33「チーム海老天」が 36 点、No.80「グルッペ D & M」が 34 点と三つ巴の様相。最終戦の結果次第では、これらの 3 チームは 2 位にジャンプアップも可能なため、最終戦ではポイント争いを懸けた激しい戦いとなるであろう。



30クラス(1501～2000ccのNA車と、1201cc～1800ccのターボ車の、改造範囲の広いクラス)今回はレース当日のクラス変更もあり、7台のエントリーとなったこのクラス。過去3戦の結果を見ると、No.83「RTカーライフ名古屋」、No.18「T - BODY EXCEL - R」、No.19「YADOKARI」の3チームを中心にレースは進行しそうであるが…。

予選

毎戦とも予選は No.83 と No.18 が僅差の争いを繰り広げるが、今回もやはりこの 2 台の争いとなる。

1 位のタイムを叩き出したのは No.18「T - BODYエクセルシビック」で、タイムは 1'01.655 をマーク。前戦ではエントリー直前にマシントラブルが発生し不参加となっているために、シリーズポイント争いの上では、今回は何としても 1 位のポイントが欲しいところ。

2 位の No.83「URG WM CLNシビック」はわずか 0.22 秒差の 1'01.882 をマーク。シリーズポイント争い上は圧倒的の優位につけており、今回シリーズ優勝を決める可能性も。

3 位の No.81「ソーワ フレミングシビック」は 3Cクラスの常連であるが、今回は事情により 30クラスにエントリー。タイムは 1'05.050。

以下 4 位に No.19「YADOKARIシビック」、5 位に初参加の No.63「ボギーズ? G13型シビック」、6 位に No.22「NAH・JWOLFロードスター」と続く。



序盤

レース序盤 45 分が経過した時点では 1 回目のピットインを先延ばしにした No.19「YADOKARIシビック」が 34 周でトップに立つ。追う 2 番手にはコースアウトのアクシデントがあったものの、No.83「URG WM CLNシビック」が 33Lap で付ける。3 位には No.18「T - BODYエクセルシビック」が 32Lap で付け、予選上位チームが好ポジションをキープする。4 位には No.22「NAH・JWOLFロードスター」が 31Lap、5 位は No.63「ポギーズ? G13 型シビック」が 28Lap で追いかける展開。そんな中、予選 3 位からスタートの No.81「ソーワ フレミングシビック」は決勝わずか 6 周で、また No.54「ポンコツハチロクトレノ」は 13 周で、マシントラブルにより早々に戦列を去ってしまう。



中盤

決勝の半分となる 2 時間を経過した時点では、No.18「T - BODYエクセルシビック」が 102 周で 1 位に立つ。2 位の No.19「YADOKARIシビック」は 100 周と、トップを狙える好位置に付ける。この時点での計時上の 3 位は No.83「URG WM CLNシビック」であったが、車両はマシントラブルで既にピットに止まったまま。その後コースに復帰することができず、結局リタイヤとなってしまふ。これにより、実質の 3 位には 90Lap の No.22「NAH・JWOLFロードスター」が浮上。4 位にはトラブルを抱えながら走行を続ける No.63「ポギーズ? G13 型シビック」が 72Lap で付ける。このクラスはレース半ばにして 7 台中 3 台がリタイヤというサバイバル状態となる。



終盤

3 時間を経過した時点でのトップは No.18「T - BODYエクセルシビック」で 127 周をラップ。これを 124 周で No.19「YADOKARIシビック」が追いかける。周回数を見るとトップ争いは実質この 2 チームに絞られた感が。3 位は 112Lap を周回した No.22「NAH・JWOLFロードスター」が続き、4 位の No.63「ポギーズ? G13 型シビック」は 90Lap を周回する。



最終結果

チェッカーまであと 12 分となったところで、No.19「YADOKARIシビック」がマシントラブルによりコース上に停止。このままりタイヤとなりチェッカーを受けずしてレースを終えることに。最後まで波乱のレース展開となった 30 クラスであったが、最終的にトップでチェッカーを受けたのは No.18「T - BODYエクセルシビック」であった。多くのライバルが脱落していく中、153 周を走りきったの優勝であった。続く 2 位には確実に最後まで走り切り、マシントラブルにも見舞われなかった No.22「NAH・JWOLFロードスター」が 134Lap で入った。3 位には初出場でマシントラブルにも見舞われながら最後まで走りきった No.63「ポギーズ? G13 型シビック」が、規定周回数ぎりぎりの 108 周を走行しチェッカーを受けた。



最後の最後でリタイヤとなった No.19「YADOKARIシビック」は、チェッカーは受けられなかったものの、規定周回数をクリアしていたため 4 位の順位が認定された。

シリーズ展望

今回シリーズ優勝を確定する可能性もあった No.83「RTカーライフ名古屋」であったが、まさかのリタイヤによりノーポイント。シリーズポイントは 55 点で 1 位の座はキープしたものの 2 位に大きく歩み寄られる結果に。

一方前回不参加であった No.18「T - BODY EXCEL - R」は、今回 20 点を獲得することでシリーズポイントが 50 点となり、最終戦での自力シリーズ優勝に望みをつないだ。

シリーズ 3 位につける No.19「YADOKARIシビック」は 40 ポイントと、ここまでがシリーズ優勝の可能性を残すポジション。

シリーズ表彰の対象順位は、最終戦のエントリー台数次第では 4 位までとなる。現在 23 点で 4 位の No.22「NAH Racing」と、12 点で 5 位の No.63「組牛歩トレノ改めシビック」が、4 位の座を懸けて最終戦に望む。

